

あなたも町を守るヒーローに！ 消防団員募集中！



写真左から 黒田昌伸（第5）、泉川聡（第6）、土屋一広（第2）、伊橋孝太郎（本部分団長）、所雅視（本部分団長）、瓜生修（副団長）、
工藤和明（団長）、土屋敏一（副団長）、石井雄士（本部分団長）、飯田剛（第1）、柴田佳祐（第3）、内藤正夫（第7）

町の安全安心を守るために ～地域密着の活動を目指して～

多古町にお住まいの「その道」をひた走る方々にお話しを伺ってみると、
そこには新しいまちづくりや町を元気にするヒントが…。



本業の傍ら、消火活動のみならず、地震、台風などの災害時には昼夜を問わず、地域を守るため活動を行う消防団。今回は、多古町消防団462名（令和4年4月1日現在）の指揮を執る、団長、副団長、本部分団長、各地区の分団長にお話を伺いました。

Q 消防団へ入団されたきっかけは？

A（瓜生 副団長） 兄の退団に伴い、「地域のためにも入団しなきゃダメよ」という地域の声もあり、自分が入団しようと思った。

A（土屋 副団長） 消防団へ入団しなければならぬ地元文化もありましたが、一番は父親の声です。消防団活動に前向きな父親に背中を押され入団しました。

A（伊橋 本部分団長） 私は、大義名分を持った野次馬根性からです。火事は危ないからなかなか近寄ることはできないですが、入団すれば消防車に乗って現場に行くことができる。好奇心も満たせて、かつ世の中の役に立てるなと思って入団しました。実は若かりし頃、消防署の職員になりたいと夢を持つくらい憧れがありました。

A（土屋 第2分団長） 地域への仲間入りという感じです。親に言われたこともありませんが、先輩たちや友人から誘われたことが入団の決め手です。「入れよ」との声に気軽に応じることができました。

Q 団員としての心がけていることは？

A（所 本部分団長） 入団当初は、近など、横のつながりを構築していければと思いますので、町にも協力をいただきたいです。

A（柴田 第3分団長） 人員確保も問題です。必要な正団員を維持するのに



所付き合い程度に何となくという感じでしたが、東日本大震災の際には、消防団が災害にあたらなければと強く思いました。その時から幼少のころ見守ってしてくれた地域の方々困っている時こそ、自分にできることをしなければという「恩返し」の気持ちで活動を続けています。地域の身近になくても、普段から地域の方々とのコミュニケーションも意識しています。

A（飯田 第1分団長） 私も入団当初は何となくでしたが、今は地域のみさんの命と生活、団員の安全を守ることに重要な使命だと感じています。分団長になった時に、工藤団長からも「みんなの命を預かる活動だ」と言葉をいただいたことを記憶しています。

A（工藤 団長） そんなこと言った？忘れてます：笑
A（泉川 第6分団長） 災害時での活動に責任を持たなくてはならないなと思っていました。今は、地域の仲間と消防団として活動しているわけですが、私たち世代は消防団活動がきっかけで地域と繋がることができたのではないかなと感じています。このきっかけがあるからこそ、仲間とともに地域を守る責任を共有できています。

A（柴田 第3分団長） 消防のリーダーとして地域に密着し、住民の安全と安心を守ることを心がけて活動しています。
A（工藤 団長） 気持ちはみんなが言う通りです。ただ、基本に考えて行動しているのは「一番先に現場に着いて、

若い人材が入ってくれない、そもそも若い人が少ないため困難を極めます。結果、年齢層も上がるため若い人とのつながりがなくなってしまう、声をかけて探すのも困難となり、退団もできなくなります。

A（工藤 団長） 災害の激甚化や多様化もあり、出動の回数も増えています。そこで、今年から災害対応訓練も始めましたが、多くの団員が対応できるようにもっと訓練回数を増やしていきたいと考えています。署員の方々に教わりながら理解を深めていって、災害に対する備えとしていけたらと思います。

~interviewer's eye~

火災のみならず、震災や台風災害などの消防団活動で安心安全を感じた町民の方々は多いと思います。それは、一朝一夕ではなく訓練の積み重ねであり、活動を根底で支えているのは地元の支援と郷土愛です。彼らは、もちろん普段は勤めていて、シフト勤務で休みが不定期な方もいるようですが、できる範囲で活動をされています。ぜひとも若い方々には消防団に入っていただきたいと思います。（女性には「ひまわり隊」もおすすです！）これからの多古町を守る消防団員が増えていこう願うとともに、消防団の方々に敬意と感謝の意を表します。



（飯田良一委員長）

一番最初に火を消す」ことです。消防署の職員より早く着いて、小さいうちに対処して引き継ぐことが大事です。地域密着だからこそだと思いますが、入団当初は気持ちが入らなくても続けていく中で一生懸命になれる活動だと感じています。そのベースには、「助きたい」の気持ちですね。そうした思いの方は多古町にはたくさんいると感じます。だから私たちも頑張れます。

Q 本団員としての意識についてお聞きします。

A（黒田 第5分団長） 分団を動かす難しさを感じています。災害時に組織をいかに効率よく安全に動かせるかを意識しながら、夏季訓練をはじめ、様々な訓練を重ねています。

A（石井 本部分団長） 団員の時は、「訓練とか正直面倒くさいな」と考える時もありました。しかし、組織を動かす側になってみて、いろいろと訓練が役に立っているんだなと感じています。我々には災害時に団員の安全を守る役割がある。しかしプロではないので、訓練を重ねる中で広い視野と心に余裕を持ちながら、冷静に判断をして、指示ができるようにしていきたいと考えています。

A（内藤 第7分団長） 正直なところ、私も「面倒くさいな」から入りました。初めて話す団員などにもいるので、コミュニケーションの大切さを感じます。組織力は、コミュニケーションがあつてこそ発揮できます。広い年代で構成されていますので、大事なことだ

と思っています。良い出会いの機会でしたね。

Q 災害時に気を付けていることは？

A（工藤 団長） 火災をはじめとして、災害時の活動で団員にケガをさせないように段取りをすることです。それには自分たちを含め、身だしなみが大事だと思っています。例えば、半袖短パンにサンダルではケガをします。もちろん現場で見かけたら注意しなくてはなりません。そうした規律は安全の第一目だと考えています。

A（所 本部分団長） 団員の皆さんは、災害に直面すると熱くなってしまう傾向になります。だからこそ、私たちは冷静になることが大事だと思えます。一度トイレに行くくらいの心の余裕をつくるよう心がけています。

A（土屋 副団長） 私が心がけているのは、現場の状況が収まった時にいかに速やかに撤収ができるかということです。団員を早く帰してあげたいのはもちろんですが、撤収時は気が緩みやすい時でもありますが、安全に活動を終わらせる段取りにも気を付けています。

Q これからの課題などありますか？

A（瓜生 副団長） 火災はもちろんのこと、台風など多種多様な災害に対応します。地域密着なので、独居の高齢者や障害のある方などに対して安全安心の一助としてもっと貢献したい。それは、令和元年の台風15号災害での教訓でもあります。住民情報を共有する